

我愛羅のヒーローアカデミア

柿の種至上主義

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原作で登場した"砂"らしき個性の人が出番シヨボすぎだったので

自分なりに"砂"の個性キャラを考えてみました。

我愛羅ファンの方には、不快かもしれません。

嫌いな方は、お戻り願います。

目次

プロローグ	1
幼少期編	
日記その1	5
日記その2	8
日記その3	15
日記その4	18
原作編	
兄より優れた弟など存在しないのだ!! (そもそも兄弟がいない)	22
閑話 男が引き起こす波紋	28
第一日 第一印象が一番 オツスオラ外道マーボー。コンゴトモ ヨロシク	32
第二日 対人精神宝具 「君の名は」	37
第三日 別に敵役チームを倒してしまっても構わんのだろう ?	42
パターン青、敵だ・!!	47
逆襲	51
想定外	57
てめーはおれを怒らせた	62

プロローグ

《 国立雄英高校 特別施設 " USJ (ウソ
の災害や事故ルーム) " 広場 》

" " ————— 考えがあますぎた…………… " "

" " 自分に力があるんだと誤解していた… " "

" " 数少ない推薦組として入学して驕ってしまっていた… "

" " 初めてのヴィランとの戦闘だったけど、そこまで苦戦しなくて調子に乗っていた… "

" " 幼き頃に助けてくれた彼の力になりたくて、並べる様になりたい一心で努力してきた、もう並べたと勘違いしていた…………… "

" " 小さい時に助けてくれたアイツの隣にいれる様になりたくて、それだけの力を持ったと勘違いしてた…………… "

" " ヴィラン襲撃で力を貸せると思って駆け付けたのに……………何なのですか (なんだよ) この体たらくは (状況は) ツツ！ " "

雄英高校1年A組 副委員長 八百万 百と、耳郎 響香は今、これまでの人生の中で、最も己の無力さを呪い、そして後悔していた。

授業の一環として、雄英高校本校から離れた施設に到着した直後、『打倒平和の象徴 オールマイト』を掲げる謎のヴィラン達による襲撃を受け、ヴィランの中にいたワープゲートらしき個性持ちによってクラスメイトの大半が施設各地に分散させられる中、

飛ばされた先に待ち構えていたヴィランを打倒し、いち早く広場に戻って来ることが出来ていたのも、彼女達の"自分の力はヴィランに通用するのだ"という勘違いを増長させたのだろう。

しかし、身体中に手をつけた不気味な容貌のリーダーらしき男が、
「脳無」と呼ぶ大型の、脳がむき出しになった異様な姿のヴィランによつてもたらされたその慢心の代償は、彼女達にとっては大きすぎる物となった。

身体能力等を強化する類の個性持ちでない彼女らには、何が起きたのか理解しろという方が無茶である。

広場に到着し加勢した直後、気がつけば目の前にヴィランが現れ、視界が急変した様にしか感じられなかったのだから……………

それでも、自分達を庇って意中の人物が負傷したのは、最早原形をとどめているかすら怪しい腕と、血だらけの体を見れば、一目瞭然だった。

「~~~~ツツツすぐに手当てをつつ！固定する物をつ　いえまずは元にもどさないとおつ！　包帯もツツツ！」

片や、半ばパニック状態で、目に涙を浮かべながら精神的ショックもあるためか上手く個性を操作出来ない中で、必死に怪我を治療しようとし、

「~~~~ツツウチが……ウチが来たばかりにツツツ！頼むっ！死なないでくれっっ！」

片や、大粒の涙を流しながら縋り付いている。

そんな彼女らに対して、その男は激痛に苛まれている筈の中、苦痛に顔を歪めるどころか

「———2人とも、無事で良かった。」

安堵の表情を浮かべていた。

「ツツツ~~~~!!!」

思いを寄せる相手が、己を庇ったために直視を憚られるほどの重傷を負ってなお己のことを気遣う姿に彼女たちはとても冷静ではいられなかった。

「ツツツ~~~~頼むっっ！死なないでくれっっ！」「ツツツ~~~~そうですわ！しっかりしてくださいっっ！」

彼の行動に対して様々な感情が渦巻く中、彼女らは必死に彼の名を

呼ぶ。

「我愛羅（さん） ツツツ!!」

——彼女達は知らない。 自分達が必死に

なっている最中に……

『アカン、全然この子ら泣き止まへん。助けてクラえもくん！』
『フン、そんな事知ったことではないわ。自分で何とかしろ。』

こんな会話が あったことなど……

幼少期編

日記その1

@#月／& a m p ;日

今日、ここでの5度目の誕生日ということで、院長が日記をプレゼントしてくれたので、本日より日記を書き始めようと思う。

吾輩は転生者である。

名前はもうある。

——とある著名な文豪の作品の冒頭部分を使わせていただいたが、しつくりこないものだ。中々に難しい……………

さてさて、俺が現在おかれている状況について話そう。

俺は、気がつけば赤ん坊に成っており、孤児院で育てられ、今もここで生活を送っている。

実の親の顔すらわからない。先程の5度目の誕生日というのも、実際の年齢が不明瞭なため、俺がこの孤児院の前に置かれていた日だ。

親を知らぬことから悲観に暮れそうなところだが、俺は今いる場所が我が家であり、院長達が親だと思っている。孤児院で共に暮らす子ども達も、俺が最年長のため、可愛い弟分や妹分がたくさんいて毎日幸せだ。

家族がいかにか可愛いかを語るのもいいが、より大事なことを話そう。

この孤児院にいる人間は、いわゆる《ファンタジー》である。というか、この世界の人間はみんな《ファンタジー》である……………

この世界では、一人ひとりが固有の《ファンタジー》を持っており、それを「個性」と称するらしい。

人権が完全にフライアウェイした凶悪なものから、「それ何の役に立つねん」と関西弁で思わずツツコミたくなるものまであり、正直なところ、お前ら絶対に食ったらカナヅチになる実を食べただろ。と思った

だが同時に、俺は確信したのだった。

——ここは物理法則が、お仕事をジャスタウェイしたファンタジーな異世界ジャマイカ。と

☆♪月↓・日

言い忘れていたが、この世界には、「個性を持たない」という「個性」を持った人も少なからず存在している。

俗に「無個性」と呼ばれ、対となる「個性持ち」に見下され、蔑まれ、肩身の狭い生活を送っているらしい。

……………中々にムナクソ展開である。

お前らそういう人の中から、強キャラが誕生する世界の絶対的法則を知らんのかっ!?

腹立つ話は置いておき、かくいう俺自身は、砂を操る個性、を持っているようだ。重要なことなのでもう一度言おう、砂を自在に操れる個性、なのだ!!!!

————— 漫画の中の技を再現し放題ではないか。カッツツツ
~~~~マジャツベ~~~~!!……………マジで夢が広がリング

それに気づいた日の夜は、興奮しすぎて、院長に拳骨を頂戴してしまった。これは、前世で暮らしていた日本の伝家の宝刀を抜かざる他ない……………

————— 誠に遺憾である。

## 日記その2

・十月<sup>六</sup>日<sup>×</sup>

この世界では、無闇に"個性"を使用することを法律で禁じており、それを破り犯罪を犯す者達を取り締まる為に"個性"の使用を認められている職種の人間を"ヒーロー"と呼んでいるようだ。

なんだかんだで、みんな陰でちよこちよこと"個性"を使っているが、堂々と使えるのはとてもいい。

——— そうだ、"ヒーロー"になろう

「京都に行こう、的なノリで、俺の目指す職業がジャストフィットした

・ \$月<sup>€</sup>%日

「どうやら、俺の"個性"は、砂を操る個性」だけではなかったようだ。

「昨晚寝ていると、気がつけば真つ黒な場所に立っており、目の前には瞳孔が縦にわれた血のような紅い目がこちらを見ていた。

——— おっばいドラゴンか!? おっばいドラゴンなのかああっつ!!??

思わず叫んでしまったのは、仕方がないと言わせてもらおう。

だが実際は、おっぱいの誘惑に負けたウェールズの赤き竜（笑）ではなく、本人（人？）曰く、「尾獣」という存在の九尾の狐らしく、名前は「九喇嘛」というらしい。

日記を書いている今になって考えてみると、確かに、おっぱいドラゴンの目は紅くなかった筈だ。

そして九喇嘛は、俺の中に住むある種の「個性」らしいのだ。

俺は、顔も知らない親から俗に言う「複合型」ではなく、それぞれ独立した「個性」を授かったようだ。

だが、そんな事実よりも……………

———九尾の狐なら、某型月の自称良妻賢母さんの方が良かったでござる……………チェンジで

自己紹介を受けた瞬間にこう思ったら、メツチャ拗ねた。どうやらここでは思ったことが全て相手に筒抜けらしい。

この後、滅茶苦茶ご機嫌取りした。

。 #月○\*日

俺の"個性"が増えたからといって、やる事は変わらない。むしろ、技の再現できる幅が広がって万々歳である。

漫画の中の技といっても、ほんとうに様々だ。

明らかに戦闘に不向きなというより使い所ゼロなネタ技から、バトル系漫画にありがちな最ファイナルファンタジー終 回間近のパワーインフレ状態で登場する敵対者絶対殺すマンな技まで、数えたらきりが無い。

だが面倒なことに、この世界では犯罪者（俗に"ヴィラン"と呼ばれるヤツ）をコロコロしても、犯罪となってしまうのだ。

物理法則とは違って、法律は変なところで仕事熱心らしい  
もういつそのこと全部ジャスタウェイしとけや

そう思わずにはいられないが、現状、"ヒーロー"は殺し無しの縛りプレイの中でこちらを殺しにきている"ヴィラン"を倒さなければならぬ。

だからこそ、俺がまず最初に挑戦する漫画は、

主人公が帽子の上に帽子を被る謎ファッションセンスの持ち主であり、どれだけ血を流していても死亡者ゼロの某海賊漫画である。

某海賊漫画の中だけでも、強キキャラは腐るほどいる。

だがまずは、体を鍛えなくては何も始まらない。

とりあえず、ワンパンで岩を消せるようにならねば。

・十月×日

身体を鍛えるのと同時に、「個性」の熟練度上げも行わなければならぬ。

「九喇嘛」の方は、「まだまだ身体が未熟すぎる」とのことです。暫くお預けになってしまったので、もう一方を鍛えている。

さて、一言で「砂」と言っても様々だ。「砂鉄」に「砂金」、「砂岩」なんていう物まである。

それに伴って、それを使うキャラは必ず存在しており、

序盤に登場した数少ないログア系で、「砂漠じゃ俺は無敵だ」とかおっしゃっているながら敗北したワニさんの様に、

本来は電気系で「常盤台の超電磁砲」とか呼ばれてる、人に向けて雷落としたり蹴りで自販機破壊を行うビリビリ中学生の様に、

発想には事欠かないのだ。

とりあえず、金欠状態が続いている孤児院のためにも、砂金収集で熟練度上げをやっつけていこう。

良く良く考えてみるとメツチャいい案じゃね？

< 〓月 > 「日

どっからか情報が漏れて、金に目が眩んだどこぞのヴィランに拉致られてしまった。

いわゆる嘸ませキャラだったのか大して強くもなかったので、連れていかれた先でお仲間共々、

顔をシユウウウウツツツ!!!超!エンタ　　テイメンツツツツ!!  
!!してやった。

だが、終わった後に、俺の他にも拉致られた子どももの存在に気づいて滅茶苦茶焦ったのは、今にしてみれば笑えるものである。

幸いにも何事もなかったが、まだロリの分類に入るような年の女の子達に対して、トラウマでも植え付けていようものなら、

「お巡りさんコイツです!!」されるところだった。

あと、今回の事件で、トップヒーローである「オールマイト」に会うことができた。なんでも、偶然近くを通ったらしい

あの人絶対「世紀末」で「モヒカン」で「一子相伝の暗殺拳」な世界から来ただろ……………

ほんとは頭パーンてできるだろ

< 〓月 > 「日

この前の一件をマスゴミが報道してくださりやがりました、チンピラ風ヴィランがわしやわしや現れるようになった。

流石はマスゴミ。略してさすゴミ。

誠に面倒ではあるが、せつかくなのでサンドバッグ代わりにして経  
験値稼ぎをしている。

さっさと紅玉落とせ、オラ。

「：月々々日

ヒヤツハツツツツ

!!!! 滅殺ツツ滅殺ウウ、塵殺

じゃワリヤー!!!!

逃げるヴィランはただのヴィランだー!!!!

向かってくるヴィランはよく訓練されたヴィランだー!!!!!!

〆月一?日

突然、この前会った、オールマイト、が菓子折り持って謝罪に  
来た。ご丁寧にピッチピチのスーツ姿でタクシーに乗って…

何を言ってるのかわからんだろうが、大丈夫だ。俺もわからん

あの人が、情報規制に不備があったせいでヴィランが来るよう  
になったとか…

当事者だったからと俺も一緒に話の場にいたが、頭の中で新技考え



てて中正直何も聞いてなかった。終わった後で拳骨が落ちてきたのは最早言うまでもない。

とりあえず、もう矢鱈とヴィランが襲撃してくることもないの事らしい。

今後は別の練習方法を検討しなければならない……武者修行の旅もありかもしれない

後、別れ際にあの人には乗馬を勧めた。特に黒い馬なんかに乗ったらかッコいいと、

名前は「黒王号」にすべきだと

### 日記その3

——今思い出してみても、私と『彼』との出会いは「強烈」の一言に尽きるものであった。

当時の私は「打倒オールフオーワン」に燃え、僅かでも情報を手に入れるべく、「サイドキック」の「ナイトアイ」と共に各地を飛び回り、情報収集をすべく訪れた街の「ヒーロー」達からの協力要請が事の発端であった。

逃走中の凶悪な指名手配グループが幼い子どもたち数名をを人質に立て籠もっている状況であり、膠着状態が続いていたらしく、私達には、強力な個性持ちで構成されていたヴィラン達の制圧を頼まれた。

強行突入に難色を示すも事態は一刻を争うらしく、「ナイトアイ」に全体の指揮を任せ、立て籠もり中の廃工場に飛び込むと、そこには異様な光景がそこにはあったのだ。

既に無力化されたヴィラン達を淡々と積み上げているまだ子どもだった『彼』の後ろ姿に、私は啞然とし、不覚にも固まってしまった。本来の髪色であろう赤銅色が、赤黒い血によってそのほとんどが塗りつぶされ、周囲にも血痕が至る所に存在していたが、怪我をしている様子はないことから返り血なのだろうと、固まった体とは裏腹に思考は働いていた。

大人のプロの「ヒーロー」が戦闘を躊躇う程のヴィラン達を、まだ年齢が片手で足りる様な子どもが勝てるはずもなく、命の危険すらある状況を容易く覆してみせた出鱈目な『彼』に私は言いようのない、

恐怖を感じた。

しかし、そんな私を『彼』は背後にいた他の子どもを守る様に移動し、己の命にかえても絶対に守り通すという不退転の覚悟を感じた。その様な目で私を見ていたのだ。

——その不退と不屈の姿と心に、私は「真のヒーローの本質」を垣間見た気がした

だからこそ、『彼』が雄英高校で再会できた時は、驚きこそしたものの、同時に確信できたのだ。

——『彼』は必ず、「最高のヒーロー」になれるだろうと……………

（——コイツ、絶対に一子相伝の暗殺拳使えるヤツだろツツ!!!  
気がついたら、「お前はもう、死んでいる」とか充分にありえるツツツ  
いや「いつから自分が死んでいないと錯覚していた?」とか言い出すかもツツ  
世界線がちげーよツツ 間違えてるよツツ  
とつとと帰れよツツツ  
なんで世紀末の霸王みたいなのがいるんだよツツお願いします、帰ろくださいツツほんとマジでツツ）  
（いい加減落ち着けツツ!!  
!!!  
この馬鹿者がツツ

なお、初めて見た平和の象徴に、完全にメダパニ状態になっていた外見子どもで中身がイかれてるヤツが約1名、それにツツコミをいれ

る狐が約1匹……………

(( ( 〇 \* ▽ \* ) 〇 ) ) 月 ( || ▽ ) 日

文字通りドッグフェイスの面構警察署長から、「証人保護プログラム」なるものを受ける様に勧められた。

なんでも、情報は一度は出回ってしまったから、孤児院のためにも、俺自身の安全のためにも受けた方がいいらしい。

「この世界は主人公が」歩く殺人現場」の、敵サイドが年中ススワタリでジェットコースターに乗る某推理(物理)漫画だったのだろうか……………

たしか最近クールキャラが崩壊してきてるヒロインの1人がそんなのを受ける様に言われてた気が……………

念のため確認したが、「眠りのナントカさん」や「セヤカテ工藤! はん」もいなささうである。うゝむ…わっかんねえ……………

取り敢えず、そのプログラムは受ける事にした。差し当たって名字を変えることになり、俺の名前は「沙瀑 我愛羅」になった

## 日記その4

(△、▽、〓)月(〓、△、▽)日

"証人保護プログラム"を受けて戸籍上の記録を一新し、弟分や妹分になりたいそう泣かれたものの、定期的に訪れることを条件に孤児院での生活に別れを告げて一人暮らしを開始した。

俺の情報が元でヴィランが集まりやすくなった街を離れたとはいえ、どんな場所にもヴィランは現れ、平日土日関係なく暴れ、何故か俺に絡んでくる輩が多い。

俺の体には九喇嘛もいる分、存在感が人一倍あるらしく、ヴィランの目に留まりやすいのだとか……その上、表情筋がお仕事をジャスタウエイしてるせいでガン飛ばしていると勘違いされて……まあ経験値が向こうからボーナス持ってやって来ると思えばオイシイモノである。

——ブラボー——ツツツ!!! 鴨ネギだぜ——ツツツツツ!!!!

——ヒヤツハ——ツツツ!!! 皆殺しだ——ツツツ!!!!

(△、▽、〓)月(\*、△、\*)日

最近"個性"の操作にも大分磨きがかかってきたと思ってる。砂を視認が困難なレベルでばらして空気中に浮遊させ、ぶつかった反応でソナー擬きを行えるようになった。

——貴様アツ、見ているなツツツ!!!!

——これが、見聞色の覇気だ

やはりこの「個性」は非常に応用が利くものである。  
今何処にいるかも知らない、顔も知らぬ血の繋がりがあある大人よ、  
この点に関してだけは

サンキューベリーはむにだ

♣? ♣? ♣? ♣? ♣? ♣? ♣? ♣? ♣?

私がヒーローを志すようになったのは、幼い頃に助けてくれた『彼』に大きく影響されたからでしょう

まだ幼く、世間の何も知らなかった当時の私は、好奇心から、初めて家を抜け出して一人で外を出歩き、運悪く逃走中のヴィランに人質にされてしまった

家にいた人間から受けたことのない、生まれて初めて向けられる  
悪意

私は畏縮してしまい、同じように攫われた人と一緒に震えることしかできなかつた……

そんな最中、攫われた子どもの一人にも関わらず、落ち着き払っていたのが『彼』でした。

彼はヴィラン達が全員集まったのを見計らうと、壁際の私達を背にし、守るようにして果敢に挑んでいったのです。

鮮やかな赤に近い美しい髪をはじめとした整った相貌に、深淵を見透かすような強い瞳、何よりお伽話のように他者を守りながら戦うその姿に、私は見惚れてしまいました

『彼』のようになりたい、『彼』のように他者を救える人になりたい、

『彼』の隣に立って支えられるようになりたい……

事件後も『彼』と関係を持つと探したのは私にとっては何の疑問も持たないことでした……

残念ながら『彼』を見つけることは叶いませんでしたが、同じように『彼』に探している人に出会うことは出来ました。

志を共にする者同士、直ぐに打ち解けあい、ライバルではありませんが、共に切磋琢磨していくようになったのです。

『彼』ならば必ずヒーローになる。ならば、ヒーローへの道を歩んでいけばきつと再会が叶うはずです。

『彼』と再び会える日までに、少しでも強くなりませんと……

( 〃 ∇ 〃 ) 月 ( \* 〃 \* ) 日

エブリデイ無双乱舞キメた状態で撃破数を数えるのが面倒になり、警察の方とも顔馴染みになってしまった。

————— サッカーしようぜツ!!お前ボールなツツ!!!!!!

? ( \* 〃 \* ) ? 月 ? ( ☒ ? ☒ ) 日

地元の"ヒーロー"達とも顔馴染みになってきた模様、先達にはしっかりと敬意を払うものである。

だが近頃、心なしかみんな目が澱んで顔が暗くなった気がする。  
やはり仕事が大変なのだろう…

「仕事頑張ってくださいね」と労いの言葉を送ったらさらに澱んだ………  
だ………解せぬう………



## 原作編

兄より優れた弟など存在しないのだ!! (そもそも兄弟がいない)

《国立雄英高等学校 入学試験会場 雄英高校本校》

雄英高校ヒーロー科……………プロヒーローになるには必要不可欠な資格取得を目的とする養成校であり、全国に存在するヒーロー科中最も人気であり、最も難しいといわれ、毎年の試験倍率が300を超える超難関高校

そんな今年度も倍率300を超えることとなった入学試験を受けるべく、全国各地から集った中学校を卒業したばかりの学生が、張り詰めた空気の中で会場に向かう中、一人の男が学校を校門前から見据え、佇んでいた。例年、雄英高校のスケールに驚き放心する者は見られるが、彼からその様な様子ではなく、むしろ己の目標を見据えるかのような強い目をしている。

赤銅色の髪に極めて整った風貌の美丈夫。服装から受験する学生だと推察できるが、その強さと思慮深さを兼ね添えた眼差しとその風貌から、年齢を誤解させるだろう。

緊張し張り詰めた雰囲気の中でも堂々とするその美しくもある姿は自然と人の視線を集めることになる。異性は整った風貌に魅了されて熱い視線を、同性はその風貌と王者の如き覇気に羨望と嫉妬の入り混じった視線を

彼に、視線を集めているという自覚はない。そも、人の視線を集めていることに気づいていない。というか実際のところ、

『すげーく……………大きいです……………』

『……………オイ、貴様のそのイかれた頭は何とかならんのか』

雄英高校のデカさに驚いていただけであって、のちに九喇嘛は『あの時改めて、コイツの外面バグってるんだと気づかされた』

と言及している。供述内容からも、この大狐が主の影響をかなり受けていることは言うまでもないだろう……………

『いつまでも馬鹿みたいに見上げてないでサツサと会場に入つたらどうなんだ』

『……………それもそうだな。——我愛羅ッ

行っきまくす!!!』

『——もう勝手にしろ……………』

——ツツコミ役が匙を投げるほど、この馬鹿は手遅れだった。

また、膝が独立して三次元なダンスシシング状態で歩く器用なことをし、挙げ句すつころびかけた地味めのモジャモジャがいたとか、いなとか……………

《国立雄英高等学校 入学実技試験会場 模擬市街地 演習》

雄英高校が最難関たる所以の一つとしてあげられるのが、実技試験である。国家からおくられてくる膨大な予算を注ぎ込むことで、実際の市街地と見紛う程の広大かつ建造物の密集した実技試験会場を複数用意、その中に四種の無人および独立自動行動機械型の、'仮想敵'を多数配置し、制限時間内に"撃破"を含め"行動不能"にした、'仮想敵'のポイントを稼ぐものである。

シンプルにして明確な差が出るこの試験を前に、毎年多くの受験生が敗れていく。筆記試験は既に別日で終了しており、残った実技試験にこれまでの全てを出し切ろうと意気込んで模擬市街地の入り口に

集まる受験生の中に、我愛羅はいた。

各々が緊張を紛らわそうとウォーミングアップや深呼吸等を行う中でただ一人、腕を組み試験開始のその時がくるのを静かに、静かに待っていた。

『オイ、サツサと実技を終わらせろ。こんなヌル過ぎる試験など早急に終わらせるに限る。』

『……………』  
……………待つているようであった

『……………オイどうした。ダンマリしおつて……………』

『……………』  
待つているのだと思われる

『……………zzzzzzzz……………ハッ!?寝てませんよーこれっぼっちも全くもって眠くすらないですからねー』

待つているのだと、思ったかった……………

『真面目にやらんかあっ!!この馬鹿がつ!!既に実技試験とやらは始まつておるのだぞ!!!』

『……………大丈夫だ、問題ない……………』

このような精神を汚染するような毒電波を用いたやり取りを経て、外面と精神が次元ごと違うどこぞの馬鹿の試験が始まった

◆?◆?◆?◆?◆?◆?◆?◆?◆?◆?◆?◆?◆?  
?

『四種目の仮想敵はOP!言わばお邪魔虫だ!各会場に一体!所狭しと大暴れしている「ギミック」よ!』

デカすぎだろ!!??

今回の実技試験、受験生達には仮想敵の数、配置は一切教えられて

いない。限られた時間と広大な敷地、そんな中で求められ、評価される力とは、状況をいち早く把握するための情報収集能力・一刻を争う場に間に合う機動力・いつ如何なる状況でも冷静に思考する判断力・単純明快にして「ヒーロー」に強く求められている戦闘力。これらの基礎能力の他、特に真価が問われるのが、圧倒的脅威を前にした時のその人間が持つ精神

隣接する建物をいとも容易く粉碎、倒壊させていく第四種仮想敵、通称「OP敵」。雄英が用意した受験生達にとつての脅威。

この仮想敵は他の三種と異なり特別な機能は存在しないが、それを覆して余りある圧倒的巨体こそが最大にして最強の武器。

『エネルギー』<sup>E</sup> 質量<sup>m</sup> × 光速<sup>c</sup> の 2乗』

この世界でも適応しているであろう物理法則に則って現れる、形を持った災害。

この場合、速度としては光速にほど遠いとはいえ模擬市街地の破壊に何ら支障はない。事実、ただの一撃で周囲を蹂躪し、受験生の戦意の悉くを粉碎した。余程相性が良い、もしくははこの巨体を行動不能に至らしめる程の破壊力を持つ「個性」でなければ為す術はない。仮に撃破できたとしても、ポイントは0。戦うメリットはなく、他の仮想敵に時間を割くのが常套手段といえる。

試験説明会の際、誰かが呟いていた『なる程…… 避けて通るステージギミックか』

その言葉を思い出し、一刻も早くこの場から離れようと仮想敵に背を向けて各々が走り出す中でただ一人、揺るぎない足取りで周りとは逆方向につまり、OP敵に向かっていく男がいた。言わずもがな、我愛羅である。

「ッ!? オイ何してる! 早く逃げろよ! そんなの相手にすんなって!! 何でそんなのと戦おうとする!」

親切心をきかせて声をかけただろう受験生に対して我愛羅は答え

た。

「ヒーロー」になるために」

こんだけデカけりやポイントもウハウハだ。

それは倒してもポイントは0です、と彼の心の声に応える者はいなかった。

OP敵もまた彼を標的として定めたのか周囲の破壊を止め、一直線に向かつてくる。周辺のビルと同じかそれ以上の高さの巨体が迫ってくるだけでも十分な威圧感があり、周りの人間は更に距離を取るべく後退する。

そこで我愛羅は、初めて構えをとった。しかし、ソレは「抜刀の構え」。無手であり、刀剣の類を衣服の中に隠し持っているようでもない状態では意味を成さない筈の構えで迎え撃とうとする彼を、遠巻きから疑問に思いながら見ていた受験生達は気付いた。砂埃が、OP敵の一撃で大量に舞い上がっていた砂塵が、ほぼ無風だったこの場で、我愛羅に向かつて収束し、周囲で渦巻き始めていることに……。「風を操る」個性「なのか!?!」「いや、よく見ると何かおかしいぞ!」

風に乗った砂ではなく、砂そのものが収束しその移動で起こった強風の中で、一振りの刀が形成されていく。はじめから不可視のソレを手にしていたかの様におさまった刀からは、高い周波数の音が遠方まで響いていた。

イメージするのは、どこぞの人柱力曰く、『ノリでぼや騒ぎ起こし、後輩の変態淑女に狙われるビリビリ自販機クラッシュャー』と『刀身という物理概念を無視してソプラノ巨人とかをぶった斬った方向オンチの緑マリーモ』。

『大将首だ!! 大将首だろう!?! なあ 大将首だろうおまえ! 首置ポイントいてけ! なあ!!』

そして現れるは、☒妖怪首おいてけ☒  
「……………一刀流『居合』……………死・獅子歌歌」

砂の刀より繰り出された、股下から頭までの正中線を通る斬撃、『逆風』。素人の目にも明らかに達人の域のソレだと分かる程の、ある種の美しさすら持つ一撃に、誰もが息を呑み、見惚れ、見蕩れる。

——— 決着は一撃で決まり、数秒後の試験終了のアナウンスまで、誰一人動く者はいなかった。

## 閑話 男が引き起こす波紋

《国立雄英高等学校 大会議室 入学試験合格者選抜会議》

入学試験合格者選抜会議と銘打っているものの、その実態は実技試験総合成績を裏で審査員となっていた雄英高校在籍職員の“ヒーロー”達による受験生への評価を交流する場である。

国立雄英高等学校実技試験、評価していたのは敵ポイントのみにあらず、受験生には伏せられ、密かに審査制で評価されていたレスキュー救助活動ポイント。“ヒーロー”の大前提たる、己の身をかえりみることなく他を助けようとする自己犠牲の精神。それが現れた行動をポイント化したもの。

しかし試験の合否に大きく関わってくるとはいえポイントは所詮ポイント。

「いや〜今年は特に豊作じゃないですか。」

「そうですね。少々特徴的でもありますが……」

「救助活動ポイントが0でここまで高得点を叩き出すとはなあ。」

「他の動きが鈍くなっていく試験後半、変わらず派手な“個性”で仮想敵を迎撃し続けた。中々のタフネスを持った逸材だね。」

「対照的に敵ポイント0、救助活動ポイントのみで合格。0P敵に立ち向かうヤツは過去にもいたけど、ブツ飛ばしたヤツはしばらく見なかったな。」

数値化され順位が出ることではつきりと現時点での総合的な優劣が現れ、後は教師たちが各々感じたことを口にし、交流するだけなのが例年の流れであった。

「ブツ飛ばしたヤツは久々だけど、まさか斬つちまうヤツが出てくるとはかけらも考えてなかったわ。」

「なかったよ。」

「ああ、この受験生のことか……」

「意見交流はそれくらいにして、その子の問題について本格的に話し合おうか。」

しかし、今年度の会議はある問題に直面していた。

「『沙瀑　　我愛羅』。今年度の入学試験でほぼ確実に主席合格。」

「筆記試験は優秀の一言。問題は実技試験・・・」

審査員の教員も含め各々で彼に対する意見を話し、議論を重ねる。「そもそも事前に受験生たちに提出してもらった『個性登録』で彼は『砂』のはずだ。斬撃に似た『個性』も所持しているのか？『個性』の隠蔽か？」

「複数の『個性』持っているのはかなり珍しいな。両親の『個性』が混ざり合うことなく、両方とも現れるとは・・・」

「いや、あれも『砂』の応用さ!!」

「ム、校長モ、アノ受験生ニゴ興味ガアルノデスカ。」

ネズミなのか犬なのか、はたまた熊なのか判別のつかない風貌。世界的にみても非常に稀な人ではなく動物に『個性』が発現した現雄英高校校長の根津。

彼がその優れた頭脳と観察力を駆使して真実を見抜く。

「みんなにはこのコマ送りにした『彼』がOP敵を斬った時の映像を見てもらいたい。」

会議場の大型スクリーンの映像が切り替わり、動揺が広がっている。

「刀ノ刀身ガ・・伸ビテイルノカ？」

「その通りなのさ!!あの瞬間のみ砂を追加して刀の刃を形成、刀身だけを延長させ、敵を斬る。常軌を逸した『個性』コントロールだね！この調子なら一体どこまでできるのやら、全く恐れ入るよ!!」

『1 3 キロヤ (ドヤア・・・!)』

あの男がこの場にいた場合、表面上では胸を張っているように見えて、渾身のドヤ顔をしながら理解不能な毒電波を発することである。

非常に腹立たしい。カムチャツカインフェルノ待ったなしである。



「さて、彼の凄さは十分に理解してくれたと思うから、本題に入ろう！」

「彼の総合得点がつけられないことですよね。」

「その通り！試験会場中に設置したカメラの映像からみるに、彼は自身の砂を会場全体に撒くことで会場全てを知覚領域内にしたのだと推察できる！時には敵の駆動系に砂を入れて動きを阻害、時に砂の直接攻撃で破壊・拘束している！これは技術班に確認済みだから間違いないね！」

「そうなってくると、僕らは一体敵ヴァイランポイントと救助活動レスキューポイントで何点つけければ良いのか分からない。こちらが把握出来ない程とは全くの想定外ですね。」

会議はますます混乱していくばかりである。

◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?  
◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?  
◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆? ◆?

既に推薦試験を終え、自身の雄英高校への入学が決定。今は友人兼ライバルの一般試験を案じて落ち着きなく右往左往していた「八百万 百」のスマートフォンに一本の電話がかかってきた。

『もしもし、八百万です。』

『百!?ウチだけど!今大丈夫!?!』

『ああ響香さん。大丈夫ですよ。試験どうでし』『あの人』がいたかもしれない!』『…え?』

その連絡は彼女にとつては衝撃的過ぎる事実だった。

『ウチも会えたり見たわけではないんだけど、人伝で“あの人”らしき人がいたって!』

連絡をしてきた彼女自身、電話越しにわかるほど興奮した様子であつたが、

『ほんとうですか!?後で間違いでしたーとかだったら怒りますわよ

!?それはもう怒りますからね!?響香さんに話した人にも私怒りますからね!?今までにないくらい怒りますわよ!?私そんなに怒ったことないですけど、周りをメチャメチャにしちゃうと思いますの!それはそれは大変なことになりますわよ!』

『お、おう。大丈夫だと思うよ。』

軽くキャラ崩壊する程の興奮具合で逆に冷静になってし

まう “耳郎 響香” であった。

第一日 第一印象が一番 オツスオラ外道マーボー。  
コンゴトモヨロシク

国立雄英高等学校の入学試験より時は流れ、日本の季節は出会いと別れの“春”へ。

桜並木こそないものの、春を感じさせる陽気な風が吹く中、街をある程度見渡すことが可能な小高い丘の上にそびえ立つ雄英高校へ“我愛羅”は徒歩で向かっていた。

指定された制服に身を包み、近年の若者にしては珍しく音楽を聴きながら、あるいはスマホをいじりながら歩くといったことはせず黙々と校舎に向かって歩く姿はある種の生真面目な空間を作り出しているように感じられ、すれ違う人物はそれぞれ「感心、感心。」などと好意的な言葉をこぼしているが……

『時間に超余裕を持って行動する俺ってばパーペキ！だが早すぎるのもイカン！どこぞのマツカン好きな腐り目ように事故つちまうからな！』

『ふざけたこと言ってないでさつきと歩かんかこのバカモン。雄英は教職員がプロヒーローだと聞く、対人戦闘の経験くらいにはなるかもしれない。まあ、どの程度のものかはワシも知らぬが……退屈せんとよいのだがな……』

『む、知っているのか雷電!?!』

『誰が雷電だ、誰が』

行われていた会話は誰が聞いても真面目ではなかった……

『誠に遺憾である。場合によっては訴訟も辞さない構えである!!』

『急に訳の分からんことを叫ぶな。』



「ちなみに除籍は嘘な。君らの最大限を引き出す…合理的虚偽」

は——!!??

担任教諭と名乗る男の独断で急遽行われたのであろう”個性把握テスト”と総合成績最下位者除籍処分の宣告は、蓋を開けてしまえば何のことはない、ただの妄言だと宣言した本人がぶっちゃけた。

完全に予想外、と思はず叫んでしまった者。

嘘で良かった、と安堵し一息つく者。

嘘に決まっているだろう、と高を括り驚く者たちに呆れる者。

「ダウト！ですわ」

そんな各々の形で緩んだ緊張の糸を再び張りつめる声がグラウンドにいる全員の耳に届いた。

「…一体何の、どこら辺がダウトだと言いたいんだ？出席番号20番、八百万 百」

先程まで浮かべていた薄ら笑いは鳴りを潜め、声のトーンも下げ、先の発言の真意を問う、

国立雄英高等学校1年A組担任、相澤消太。あいざわしょうた ヒーロー名、イレイザーヘッド

周囲の人間からの視線を一身に浴びつつも、全く物怖じせず、八百万 百は堂々と返答した。

「わたくし、雄英高校に入学するにあたって、これまでに在籍していた先輩方を参考にと考え、

色々と調べましたの。その中で気になったのが、昨年”雄英体育祭”1年生部門」

”温故知新” 故ふるきを温たずねて新あたらしきを知る 彼

女がより上を目指すために掲げている心構え。現在のネット社会、先達の勇姿を鮮明に見られる現状を活用しない手はなく、推薦入学によって作られた時間を、彼女は無駄になどしていなかった。

相澤は、何が言いたいのか理解したようで、再び笑みを浮かべながら無言で続きを催促する。

「昨年の体育祭のみ、明らかに参加人数が例年より少なかった：。そう、ちょうど1クラス分、20人ほど。相澤先生、先生は昨年も1年生の担任をされたようですがその点に関して間違いはありませんか？」

「よく調べているじゃないか。ああ、確かに俺は去年も1年の担任をしていた」

「さらに調べてみると昨年は1クラス全員除籍処分になったそうですが、先生がそのクラスの担任で除籍処分を下されたのではありませんか？」

他の生徒の表情が凍りつき、ある生徒はハンドボール投げの時とは別の意味で涙目であった。

「まあ君らは、去年の奴らに比べれば見込みがあるということだ。今後も、せいぜい除籍処分にされないよう頑張ってくれ」

質問への明確な回答がされることはなかった。

◆◆◆

「しっかしスゲーな。そんだけ頭良い上に個性把握テストもトップとか。才能の塊みてえだな。ほんと羨ましいぜ」

「ありがとうございます上鳴さん。しかし私などまだまだ研鑽がたりていませんわ。現に、個性把握テストは2位でしたし……ッ!?!」

「そう謙虚にならなくても良いだろう。十分に優れた成績だと思わすが」

記憶の食い違い、突然現れたようにしか思えない生徒と思われる

男、急激によみがえる記憶。それらに誰もが驚愕し、混乱した。億劫そうに連絡事項を伝え終わり、校舎に戻ろうとした相澤も態度を一変させ、端末で順位を確認する。

個性把握テスト総合順位1位・・・”沙瀑　　我愛羅”  
個性把握テスト総合順位2位・・・”八百万　百”

相澤は動揺を表情に出さないよう努めながら、突然現れた彼を視界におさめ、個性使用を阻止しつつ一挙一動を観察する。

彼は警戒していたはずなのだ。一癖も二癖もあるクラスの生徒の中でも、明らかに飛び抜けた力を持った生徒として、特に反社会的な思想に染めさせてはならない生徒だと判断して。

それなのに、今の今まで完全に思い出せなかった。というよりも意図的に思い出せないようにさせられていたと判断。事前の”個性届け出”では届け出なかった、隠蔽していた”個性”と当たりを付け、問い質す。虚偽は一切認めないとの意思を込めて。

「何をした。出席番号10番、沙瀑　　我愛羅」

周囲にいた生徒はみな距離を取り、彼の周りにだけ人はいない。当然といえば当然だ。誰であれ、自分の傍に突然音もなく人が出現すれば警戒するのが普通だ。そして他の生徒はいまだ突然の出来事に混乱している様子。

「・・・ただのちよつとした特技です。これでも、小さい頃は本気で忍者になろうと色々やっていましたから」

特に周りの様子を気にせず、相澤の瞬きの合間を縫うタイミングでもなく、事も無げに全員の視界から再び消えてみせた我愛羅。

本人的には茶目つ気あるらしいジョークもむなしく、生徒たちの頭に新たな人種カテゴリーとして『N I N J A』が定義されようとしている中、相澤は動揺を顔に出さないようにしつつ思考を回転させるが全く理解できなかつた。

自分の個性を無効化した？視覚を遮断されていないため可能性は低い

嘘をついている？少なくともそんな様子はない

異形型の常時発動個性？ON—OFF制御が含まれているため不適当

結局のところ、本人の言うように（個人的には極めて合理性に欠けるが）常軌を逸した特技と判断するしかなかった。

事の真実としては、とある人柱力が『アサシン先生、マジアサシン先生』と尊敬する人物が使う、ある世界の月で、特異点で、ありとあらゆる戦場で、敵対者を苦しめ窮地に追い込んだ“圏境”を自己流で体得し、使用していた。

気を使い、周囲の気を感じし、自己の気配を自己の存在ごと消すという隠蔽・隠密系の個性保持者が聞けば発狂待ったなしの技の極致をこの男は『第一印象は大事、変に悪目立ちしたくない』という理由で使っていたのだ。

理解しろという方が無理である。

しかし“圏境”に他者の記憶まで消す力はない。独学で到達した技術は本来の領域を超え、イギリスで最も有名なシリアルキラーが保有する対戦終了の瞬間に目撃者と対戦相手の記憶から情報が消失する特殊スキル“情報抹消”の域にまで到達しかけている。

だがこの男、自分でやっておいて完全に理解していないのだ。

結局、後に授業等も控えていることもあって騒動は収束、本人の思惑とは真逆の、クラスメイトにとんでもない第一印象を与えて個性把握テストは幕を閉じた。

『・・・なんでさ。』

『当然だヴァカめ』

## 第二日 対人精神宝具 「君の名は」

ヒーロー育成の最高峰と言われる国立雄英高等学校、通称“雄英”でも基本教養として、一般教科の授業が午前中に行われる。ヒーローは敵を倒してはい終わり、と思われがちかもしれないがそんな単純な仕事ではない。デスクワーク等が欠片もできないようなヒーローはどれだけ力があるかと二流や三流にすら劣る。

“ヒーロー育成の最高峰”と呼ばれる雄英は、トップヒーローたちの母校だけあり一般教養を疎かにはしない。さらに言えば、それら一般教科を担当するのは当然、教員として雄英に勤めるプロヒーローたちである。彼らは☒オールマイト☒を筆頭に知名度の高いヒーローが多く、普段テレビやパソコンでしか見ることのなかったヒーローが目の前で自分に授業をしてくれる。

マニアやファンには唾涎ものであり、人によっては幾ら金額もつぎ込んでも言うかもしれないが、悲しいかな雄英に入学してすぐの生徒はそのことに欠片も気づくことはなく、

・・・なんか、普通だ。

そう思った。

◆◆◆

授業があれば当然、休み時間もある。また入学してまだ最初の授業のとなるため、どの教科も今後の方針等の説明が大部分で比較的チャイムよりも早く終了することが多い。生徒たちはその時間を利用し、今後少なくとも一年は一緒のクラスとなるクラスメイトと積極的に交流、親睦を深める。

どのクラスも明るく、活気にあふれるように見えたが、1年A組だ



けは様子がおかしかった。

(((((き、気まずい・・・))))))

席の近い者で、あるいは同性で交流し、会話に花を咲かせながらも、1年A組の生徒のほとんどが同じことを感じていた。

その微妙な空間を形成しているのが、我愛羅である。

個性把握テストを通しクラスのほとんどの者が、担任教師の相澤を強制退学処分も場合によって下す恐ろしい人物と現在は認識しており、その恐ろしい人物すら警戒させるようなヤベー奴、それが他のクラスメイトから見た彼の印象であった。

彼の周辺に人はいない、話しかける人もいない、周辺の席の生徒は席から離れた場所に移動していた。そのため教室内で不自然に人が少ない空間がぽっかりとできてしまっている。

人間は恐ろしいものと同等かそれ以上に得体のしれないもの、未知の存在に警戒心を抱く。個性の無効化や記憶の改ざん等、警戒させるには十分すぎることをやっていた。

やらかしちやったのである。

ところが本人だけその自覚が皆無であり、読書をしつつ、気にしていない体を取りながらも本人的には、マジかよこんなん聞いてないんだけど、といった思いでいっぱいだったりする。

そんな感じでもうしばらく続くように思われた気まずさは、脳内でこんなん聞いてないんですけどー！やり直しを要求したいんですけどー！などどこぞの水を司る駄女神よろしくクレームをしている彼の元に二人の生徒が向かったことで変化が訪れた。



我愛羅は雄英高校敷地内に併設された大食堂で昼食を買うべく生徒の列の中にいた。雄英高校の大食堂では、クックヒーロー $\square$ ランチラッシュ $\square$ を筆頭としたプロによる一流の料理を安価でいただくことが可能となっているのだ。

「白米に落ち着くよね最終的に!!」

サムズアップかましながら放たれる真理とも言うべきランチラッシュの名言である。

複数の料理を受け取る際、我愛羅とランチラッシュは無言でサムズアップを交わしていた姿があったとかなかったとか。

明らかに一人で食べるには多い、具体的には“個性”を使用しつつトレー三つを運んで混雑した中を進んでいく。汁物や水が注がれたコップなどの人のごった返した場では極力持ちたくない物も多く所持しているにも関わらず、その足並みはよどみない。

さらに言えばトレー上の液体は波紋すら浮かべていない。体術や武術に詳しくない素人目でも異常と断定できるほどの体さばきで人ごみの中を縫うように歩いていく。

その向かう先には既に席を確保してくれていた女子生徒が二人。 $\square$ 八百万 百 $\square$ と $\square$ 耳郎 響香 $\square$ である。

「遅くなってすまない。待たせてしまったな」

「ツー・いえいえ！お気になさらないでください！…それほど待っていないので」

「そうだよそうだよ！…混んでるし仕方ないよ」  
「・・・そうか」

教室とは真逆の何故かやたら強い剣幕で違和感を感じなくはなかったが、それぞれに注文した昼食のトレーを渡して彼女たちの向かいの席に座る。

周りの生徒たちは、我愛羅の整った容姿と美少女と言っても過言ではない女子生徒二人というメンバー構成にただならぬ雰囲気を感じて遠巻きにさりげなく様子をうかがっている。

なお、男一人に女二人の構成に修羅場を勝手に想像している者が実のところ大半であったが、それは詮無き事であろう。

その状況を肴に『この世の全ての赤』を煮詰めたような劇物の集大成を汗だくでイイ笑顔しながら食している愉悦部員もいたがこれもまた問題ないのである。

……ないっただらないのだ。

◆◆◆◆◆

「あ、あの、沙漠さん・ひ、ひとつよ、よろしいでしょうか？」  
「どうした、八百万」

野次馬どもが期待した修羅場もなく不特定多数から舌打ちが聞こえてきたりもしたが気にすることもなく食事を終えて一息ついている中で、事は動き出した。担任教師との会話で見せた落ち着いた様子とは逆に、ひどく緊張しているのか視線が右往左往したり指先で遊んだりを繰り返した末に八百万はある☒お願い☒をしたのだ。

「な、名前で、呼びびしても、よよろしいでしょうか？あああと、私のこともな、名前で呼んでいただけませんか？」

「ツーううウチも、いいいかな!？」

ひとつではなく二つの要求であり、その内容ともう一人がそれに便乗した様子から、またしても不特定多数から舌打ちと幾人かが急に席から立ったような音がしたが三人の中にそれらを気にする者はいなかった。

「ああ、二人がいいのならこちらも喜んでさうしよう。それでは改めてよろしく頼む、百、響香」

これまでの人生で最大と言えるほどの勇気を振り絞ってのお願いを何の躊躇いもなく了承し、不意打ち気味に念願の名前呼びまでされたことで、二人は嬉しさやら何やらでフリーズしその後徐々に首から赤面症もびっくりなほどに赤くなっていく。耳郎にいたっては耳の

コードの先まで赤く染まっているほどだ。

なお、それらを引き起こした張本人はというと全く気付かず、新しく人数分のお茶を取りに席を立っていた。

「待って！・とりあえず落ち着こうよ峰田くん！そんな血涙流しながらフォーク持って突っ込みに行こうとしないで！」

「そうだぞー！上鳴くんも落ち着きたまえ！一雄英生として相応しい行動をだな！あと地味に帯電するのも止めてくれないかな!?みんなも！特に女性陣！彼らの関係の話で盛り上がる前にクラスメイトを止めるべきだろう!?!」

私怨や嫉妬で突<sup>フォークチャージ</sup>撃かまそうとするクラスメイトにも気づいてはいなかった。

第三日 別に敵役チームを倒してしまっても構わんのだろう？

午前中の基本授業、昼の休み時間を終え午後からは各科の専門的な内容の授業が行われ、雄英高等学校の一年年計40名が在籍しているヒーロー科はここからが本番と言うべきであり、一年生が学ぶのは“ヒーロー基礎学”である。

「わーたーしーがー！普通にドアから来た!!」

一年A組の記念すべき第一回目の“ヒーロー基礎学”担当講師は、現在のヒーロー社会において知らぬ者はいないと断言できるビッグネーム、No.1ヒーローとして名高い☒オールマイト☒であった。テレビの画面でしか見たことがなかった超有名人の登場に、クラスが色めき立つ。

「オールマイトだ!!すげえや 本当に先生やってるんだな！」

「銀時代のコスチュームだ！」

「画風が違い過ぎて鳥肌が！」

各自が思い思いの意見を述べ、誰しもが興奮を隠せないようだ。

『あれ？なんか前あった時よりラオウオー感がなくなってるような…？北斗神拳の腕が鈍ったか』

『もはやどこからツツコめばいいのか、儂にはわからん』

失礼、若干名の例外がいたようだ。

◆◆

“ヒーロー基礎学”

オールマイト曰く、ヒーローの素地をつくる為様々な訓練を行う課題。

そんな授業の最初を飾るのは☒戦闘訓練☒

各自が入学前に送った個性届と要望沿って作成された戦闘服コスチュームに着替えて一同が集まった場所はグラウンド・βであった。

内容は、クジ引きで二人一組を作ったのち「敵組」ライアン「ヒーロー組」に分かれて行う屋内での対人戦闘訓練。

状況設定はみんなご存じなので、省略ハシヨルする。

手抜きとか言っってはいけない。設定がアメリカンだとか設定も条件も適当過ぎてあまり意味がないとかも言っってはいけない！

どちらも新人ながら頑張っているのだから!!

そんなこんなで始まった授業における生徒たちの意欲は十分なものであったが、それが今ではさらに高まっている。

「『頑張れ!』って感じの『デク』だ!」

「『個性』使えよデク。全力のテメエをねじ伏せる……!」

「君が凄い奴だから勝ちたいんじゃないか! 勝って! 超えたいんじゃないか! バカヤロー!」

「その面ツラやめろヤクソナード!」

BGMは『サンライズ』でどうぞ

最初に行われた「ヒーロー」緑谷&麗日のAチームVS「敵」ライアン爆豪&飯田のDチームの対戦は白熱し、接戦であり、切島曰く☒アツかった☒一戦目であったことも大きな要因の一つと言えるだろう。誰も負けていられない、自分だつてと奮起しそれぞれの対戦に臨んでいた。

当然ながら、体内の同居人から“歩く殺人現場の逆Ver.”と称される男もその例に漏れていないことと、九つの尾を持つ超常存在が主の影響を受け始めていることは、最早言うまでもないだろう。

ライアン「敵」口田&砂藤のFチームVS「ヒーロー」芦戸&沙漠我愛羅のEチームの対戦

爆豪による演習用ビルAの大規模破壊、轟の急速な冷却と加熱による建物の耐久性の不安などの理由から場所は移動し、演習用ビルC。

制限時間は十五分、回収目標の核の位置は不明。これまでの演習用ビルの中で最も階層が多くかつ広いビルでありなおのこと「ヒーロー」側が不利な状況でのEチームの動きは他の生徒には不可解な行動に見えた。

「?なにやってるんだ、あいつら・・・」

「ケロ、芦戸ちゃんが地面に穴を開けているみたいだけど沙漠ちゃんは何となく動いていないし、どういう作戦なのかしら?」

訓練開始前にいくらか話し合った様子はあったが、そこからは余り会話をしていないように見える。地下モニタールームには映像のみで生徒は音声が聞こえないため余計に不思議であった。それに加え、いささか芦戸がソワソワしているように見て取れた。音声が聞ける教師のオールマイトなら何か知っているのではと生徒たちは視線を向けるが、そのオールマイトも何が起こるか分からないでいた。

『ねーねー作戦で何か良い案あるー?』

『あるにはある。先程の轟のような個性が相手でも恐らくはこれで勝てるだろうが、どうするかは決めてくれ』

『それにしようよ!!それでどんな作戦?』

『勝利条件は目標の回収か敵の確保だが、本当の核、いやこの場合は核弾頭かそれに類するものを想定すれば捕縛ではなく気絶ないしは完全確保の戦闘不能にするのが望ましい。そのために敵チームの完全打倒だ。これから言うことをやってくれ。驚かせてみせよう』

作戦伝えてないじゃん、とオールマイトは思ったが芦戸少女も了承しているし注意しなかった。先の轟少年のワンマンプレーに対する注意点を踏まえて相方に事前相談しているとも言えるため、注意などを躊躇い見ているしかなかったのだ。

ぶつちやけ初授業もあつてチキっただけなのだが。

『オッケーー!言われた通りにやったよー!』

先程の二人のやり取りやそれに対することを考えていたが耳のインカムから聞こえる会話に意識を戻された。時間を見れば制限時間の三分の一を経過している。

『感謝する。さて、始めようか・・・』

残り時間でどのように攻略するのかと考えを巡らすオールライト以下モニタールームの全員が急な地震にバランスを崩しかけた。

「ッ!!みんな大丈夫かい!?!」

それぞれ驚きの声をあげ、尻餅をつく者も何人かいたがモニタールーム内の生徒の無事を確認し画面に視線を戻す。場合によっては授業を中止して避難しなければならぬかもしれない、そう考えつつ画面の向こう側の生徒を確認し、連絡用のマイクを落としかけた。

「……………嘘」

はたしてそれが誰による眩きだったのかは分からない。モニタールーム内の生徒か、画面の向こうの生徒か、あるいは自分自身がこぼしたものかもしれない。それほどに見たことのない光景だった。

画面に映るのは、芦戸が開けた穴から間欠泉のように周りの建造物の高さをゆうに超えて地面から溢れる砂。

重力に逆らって上へ上へと昇った砂は、まるで生き物それこそ巨大な蛇か竜のようにうねり演習用ビルCを中心にとぐろを巻き、窓や出入り口、非常出入り口、換気扇から際限なく中へ中へと侵入していく。

ビルの至る所に仕掛けてあるカメラからの映像はまるで建物が水没する際の早送りのように流れ込む砂で埋め尽くされる様子が映し出されている。広く長い廊下も空いていた数十はあつた部屋も残さず埋め尽くし、核を置き室内で待ち構えていた人間すら押し流している。

異様なのは、回収目標であつた核を模した砲弾型の張りぼてのみが全く巻き込まれていないところだろう。敵役の二人はとつくに砂の濁流に吞まれ洗濯機のような回転に意識を手放しているのに対して、核のみが微動だにしていなかった。増強型に限りなく近いオールライトを含め、一年A組には特定の物質を操作するような☒個性☒の



持ち主はおらず、だからこそ真の意味で彼の個性操作の異常性には気づけなかったが、それでもなお常軌を逸していると断言できる操作の精密さ。

砂が動きを止め、水がひいていくように室外へ動いていった後、興奮冷めやらない様子の芦戸と共に悠々と歩いてきた我愛羅は部屋に置いてあった核を芦戸の提案で二人で息を合わせて回収し、

勝負を決めたのだった。

「ツッ・ヒーローチーム、WIIIIIIIN!!」

時間にして凡そ7分。最早闘争では無く、掃討ですらない。そんな何かが終了した。

一人だけ音声を拾い、周りより早く正気を取り戻したオールマイトの宣言は無音と化していたモニタールームによく木霊していた。

パターン青、敵だ・・!!

「かたまりになって動くな!!!」

場所は《国立雄英高校 特別施設》ウソの災害や事故ルーム

災害救助らで功績を残している☒スペースヒーロー「13号」☒の授業における心構えが終わった直後に発せられた☒イレイザーヘッド☒の言葉を即座に理解できた者はほとんどいなかった。

一年A組がいる出入り口より先、USJのほぼ中心に位置する広場に突如現れた謎の黒い霧とそこから続々と出てくる複数の人間。敵意、悪意、害意、e t c. それらを伴って、或いは分かりやすく顔に浮かべている彼らを見てからの☒イレイザーヘッド☒の行動は速かった。

「なんだアリヤ? また入試ん時みたいなもう始まってんぞパターン?」

「動くな! あれは敵だ!!」  
ヴァイラン

「13号避難開始。学校への連絡も試せ! 上鳴おまえも”個性”で通信を試せ!」

状況を理解できていない生徒への警告や同僚らへの指示は的確かつ簡潔であり、ようやく事態を理解した生徒たちも行動をやつと開始しようとして動き出す。行動が遅い生徒に僅かに苛立つが敵との対峙経験がなくまだまだ若い彼らにこれ以上を求めるのは酷だと考えを切り替え、☒イレイザーヘッド☒は単身で広場の敵集団の中に飛び込んでいく。

射撃隊などと自ら遠距離系の個性持ちだとばらす敵を制圧し、次いで前に現れた岩のような異形型の敵を倒そうとしたところで、その敵が落ちてきた何かに叩き潰された。

突然のことに距離を離しその何かを見てすぐに彼は理解した。

「砂の拳？っ!! 沙漠か！なぜ来た!? 13号のサポートをしてろ！」

彼が単身で敵集団に飛び込んで行ったのは、生徒たちを少しでも安心させたかったのもあるが、

13号と今自分の目の前にいる生徒になら他の子どもたちを任せられると考えたからであった。

“ 沙漠 我愛羅 ”

入学試験時から他の生徒の追隨を許さない實力を見せ、現時点でプロの社会に出ても頭一つ飛び抜けていると断言できる彼がいたからこそ戦闘経験が豊富と言えない13号を補って余りあると判断し任せたのだ。彼がここに参戦してはその前提から崩壊する。

「上の方にも何体か護衛者ガードマンを置いてきた。並の敵では階段を突破できない」

脳裏に浮かぶ最悪の結末を讀んでか、我愛羅は状況を淡々と説明しながら敵を蹴散らしている。

階段の方を隙を見て窺えば、出入り口に繋がる階段に砂で形作られた西洋の重騎士がその身の丈と同じほどの巨大な盾や剣、ハルバードを携え階段に近づくと敵を吹き飛ばしていた。

☒イレイザーヘッド☒は、いやこの世界の人間は知らない。外套や武具の紋章まで正確に再現されたソレらが第6の特異点において人格にまで至った王が生み出し、多くの存在を苦しめた聖騎士である。作り出した本人とその内に住む超常存在を除いては知り得ないことである。

『ガウエインロリコンゴリラほどではないが十分に面倒くせえからなああの肅清騎士！つか戦闘も料理も大概にしろよロリコンガウエイン』

「近づくと者を攻撃するように命令を組み込んである。自動ゆえあまり

階段には近づかないように」

補足説明を加えつつ、自分のカバーまで行っている彼の力にもはやあきれながら☒イレイザーヘッド☒は戦闘に意識を向けるようになっていく。

「とつとつと制圧して安全を確保する。カバーは任せた」

「――委細承知」

だが、彼らは侮り過ぎていた。

「ご丁寧に刃まで潰してあるとは、舐められたものですね」  
敵の悪意を、底力を。

我愛羅が作り出した護衛者のほとんどは大階段に配置されており、事実敵の進行を確実に阻んでいた。敵の突然の奇襲から判明している転移系の個性持ちを警戒し、一年A組の護衛にも数体の護衛者を残していた。

我愛羅の懸念は正しかった。いくら視認することで個性発動を妨害できても永續するわけでもなく、隙をみて転移個性の黒霧は生徒と出口の間に転移したのだ。それらを見越しての配置。想定内のはずであった……

誤算だったのはその黒霧の実力。生徒らに守っていた護衛者を容易く切断してのけた黒霧は、正史原作同様の流れを経て生徒らをUSJ各所に散らしていったのだ。

「くそ!!! 沙漠! 恐らくあいつらはUSJ各所に見えた敵の場所に飛ばされたはずだ! 支援はできるか!？」

「――やってみせる」

不覚をとったことを後悔する二人の周囲には依然として多くの敵

が存在し、直接助けに行くことはできず最低限の支援しか行えないのが現状に先程と打って変わって焦りが生じ始めていた。

想定以上の事態が起きたゆえの焦り。

だが戦闘経験が豊富な二人であれば数秒もしないうちに冷静になれる程度の僅かな精神のほころび

「はあ、有象無象じゃ相手にならないか・・・脳無、やれ」

その数秒を的確につかれた両者はともに目の前に突然現れた黒い巨漢への対処が一瞬だけ遅れ、

手だらけの敵が“脳無”と呼んだ存在の攻撃を許してしまう。

決して少くない鮮血が宙を舞い、その直後に轟音と突風が辺りを蹂躪した。

## 逆襲

「凄いなあ、最近の子どもは。あれでまだ学生なんだもんなあ」  
「有象無象を簡単に蹴散らしてその上、先生まで庇うなんてなあ」

ねっとり粘つくような、不快感を感じる嘎れた声

今回の雄英襲撃の主犯格の一人、死柄木 しがらき とむら 弔はしつかりと捉えていた。

命令を出した脳無がレーザーヘッドの頭を、咄嗟に防ごうとした両腕ごと砕こうとした瞬間、隣にいた赤銅色の髪の毛の生徒が脳無を止めようと砂の拳で攻撃し、止められないと判断するやいなや盾を作り出し同時に攻撃対象であったレーザーヘッドの 衝撃緩和のバックステップ 後 退を砂で後押ししたのを。

「あの一瞬でそれだけやってのけたのはホントにスゲーよ、マジで感心しちゃったよ。でも、

———それだけじゃ脳無には勝てないんだよなあ」

与えられた新しいおもちゃを誇らしげに自慢するかのようには、死柄木は脳無の力をベラベラとしやべっていく。

対平和の象徴 怪人“脳無”

衝撃吸収、超再生などの複数の個性をつけられ思考も痛覚も消され、ただ他人の命令を実行するだけの人間と呼べるかも怪しい死柄木

曰く「超高性能サンドバック人間」

対オールマイイト用に調整され現時点での100%のオールマイイトの力に匹敵する脳無の拳は、砂の盾を貫き、後押しを受け加速した後退にすら容易に追いつき防御の腕を小枝を折るかのように砕き、イレーザーヘッドの頭を捉えていた。

「まずは一人」

確実に頭部を捉え地面のシミに変えていたであろう一撃は、我愛羅の咄嗟のサポートによりイレーザーヘッドの命を奪うには至らなかったが、両腕を砕かれ多少減衰されたとはいえオールマイイト級の一撃を人体の急所の一つにもらった彼は、殴り飛ばされた先、我愛羅が展開した砂の中で指の一本すら動いてない。

「■■■■■■■■!!」

凡そ人が発するとは思えない、哀れな<sup>脳</sup>化<sup>無</sup>け物の雄たけびが広場に響いていく。

◆◆◆◆◆  
《国立雄英高校 特別施設 "USJ(ウソの災害や事故ルーム)"  
山岳ゾーン》

敵連合襲撃の主犯格の一人、黒霧によって分散させられた一年A組の生徒の内、ここには三名が転移させられていた。

「アツブネ！今見えたマジで三途の川見えたわ！！マジで何なんだよ!? どうなってんだよ!？」

自身らを取り囲んでいる敵の攻撃から何とか逃げ続けている男子の名は、上鳴かみなり 電気でんき。

「そういうのは後!!」

手に持つ刃を潰した片手剣擬きを用いて危なげなく敵を撃破する女子は、耳郎じろう 響香きょうか。

「そうですね！今はこれだけの数を如何に早く無力化するか！」

自らの個性で創造した身の丈ほどある鉄棒による棒術で難なく敵を撃退するのは、八百万やおよろず 百もも。

原作正史とは異なり、思いを寄せる相手に追いつきたい一心で切磋琢磨してきた彼女らにとっては、上鳴すら満足に捉えられない敵など物の数ではない。目標へとひたむきな努力を続けた彼女らの実力の高さは、傍から見ても明確に分かるほどである。足手まといに等しい上鳴をカバーしながらの戦闘でも、確実に救援が来るまで持ちこたえること



も殲滅することも今の力で可能であった。

——しかし、彼女たちの目的は他にある。

「早くこの場を制圧し、広場へ応援に向かいましょう!!」

「そうこなくっちゃ!!」

「いやおかしいだろ!? 何で連戦が確定してんの!?!」

上鳴の叫びは、彼女らにとっては愚問に等しい。

『我愛羅の隣に立ちたい』そのために何年も彼女たちは辛い訓練を続けてきたのだから。

「男のくせに弱気なんだから・もうちよつと我愛羅を見習えつての」  
「我愛羅さんを比較対象とするのはあまりに上鳴さんがかわいそうですわ」

「確かに考えてみるとそうだな、すまん上鳴。ウチが言い過ぎた」  
「チクショー! フォローされてんのに全く嬉しくねえ!!」

まだそう多くない学校生活の中や、今置かれている戦闘の場など至る所で彼女らが口にする一年A組屈指のイケメン。非リアであり、リア充をクラスメイトの峰田と同様に憎む上鳴は悔しきでやけを起こしそうになっていた。

思い返せば、この前の戦闘訓練においても、件の相手と組めなかったせいも耳郎に露骨にがつかりされ、当の本人は訓練後の反省で八百万に大絶賛されていたのだ。確かに凄かったのは認めないわけにはいかないが、途中から称賛の中に私情が混じっていたのは誰から見ても明らかであった。そのため上鳴が峰田と共に我愛羅を一方的に敵視するのはもはや必然である。

「クソ羨ましいなチクショー!!」

原作  
正史通りの手段で、原作  
正史とは異なった思いの丈を上鳴が敵に八つ当た  
り気味にぶつけることで彼女らは敵を全員無力化したのだった。

「早く広場に向かいましょう」

「その前に新しい服作れって。……にしても相変わらず発育の暴  
力……」

絶縁シートの影も相まって、ライバルとの（何がとは言わない）圧  
倒的実力差で暗黒面に落ちていきそうな耳郎の姿はショートした上  
鳴が謎の恐怖を感じる程のものであったが、  
完全に余談である。

◆◆◆◆◆

「は？」

死柄木の余裕と嗜虐心に溢れた顔は、一転して困惑のソレへと変化  
する。

レイザーヘッドを殴り飛ばした脳無が、全身から血飛沫をあげた  
のだ。

目を離れたわけでもない。しかし、死柄木には何も見えなかった。  
目を凝らせば、脳無の全身にはいくつもの裂傷が見えたのだった。  
混乱から未だに抜け出せない死柄木の耳に届く、鯉口が鏢と重なる  
のぶつかる小さな音。

「☒超再生☒の上に痛覚も無い、確かにそう言ったな」

音の発生源に視線を向けると、刀を携え居合いの構えをとる我愛羅  
がいた。

「――ならば、多少斬っても死にはしないだろう？」

そう言い終えるや、我愛羅の腕が僅かにブレ、

脳無の再生が終わるよりもはやく新たな切り傷が脳無の全身に刻まれる。

「――!? つ!? 脳無に一体何しやがった!!？」

先程までの余裕の欠片も感じられない程狼狽えながら死柄木は叫ぶ。

「――斬った」

そんな敵のことなど知らんとばかりに我愛羅は淡々と事実を伝える。

『バージル鬼兄ちゃんの☒次元斬☒なめんじゃねえぞ！』

振り抜かれるは常軌を逸した神速の抜刀。軌道を辛うじて捉えることができるかどうか、音を置き去りに無拍子で放たれる斬撃が新しい傷を生み、鮮血が宙を舞った。

## 想定外

一般人なら立つことすらままならない暴風が吹き荒れ、直後に鯉口が鰐と重なることで生じる小さな音。そして遅れるように空中に鮮血が舞う。

それらが繰り返されること数十度

「はあ？なんだよ。何なんだよアイツは。チートかよぶぎけんよ。脳無だぞ？対平和の象徴のために態々用意した化け物だぞ。いい加減死ねよ。イレイザーヘッドみたいにブツ飛ばされるよ。なんで脳無とやり合つてて脳無が押されてんだよ！」

先程までの余裕が消え、怒りや焦燥、苛立ちを隠そうともせず死柄木は己の首を掻き巻く。既にボロボロとなった肌からは血がにじみ彼の爪を赤く染める。しかしそんなことにも気が付かないほどに死柄木は冷静さを失い、辺りはむせるような血のにおいが立ち込めていた。

数十度にわたる全身からの裂傷による出血は本来であれば血の池に沈む人間をたやすく作り上げる。しかし度重なる出血による消耗を脳無は欠片も見せず、剛腕から生み出される突風は、つけ入る隙がなく傍観するしかない死柄木や黒霧、水難ゾーンから脱出してきた緑谷たちに濃厚な血のにおいを届けていた。

「なあ!? オイラ言っただろ。アイツなら俺たちの助っ人なんか必要ねえって！ はやく他のみんなと合流して離れようぜ、な？ うっぷ」

そう言いながら峰田 実は少しでも早くその場から離れようと緑谷たちに呼びかけていた。時折むせ返るような血の臭いを嫌がったのか鼻と口を押さえ、顔を真っ青にしながら。

「確かに助太刀でできる隙もないしその必要もなさそうだけど、僕らが離れたら本当に我愛羅くんは敵の集団の中で孤立してしまう。それ

だけはダメだと僕は思うよ」

「ケロ、たしかにそうね。いくら我愛羅ちゃんでもそれは流石に厳しいでしょうし、いつでも援護できるようにはしておかなくちゃ」

それに対する緑谷、蛙吹の回答は峰田の求めるものではなかったが、反論できることでもなかった。その意見への反対はそのまま我愛羅を見捨てることのように峰田は感じたためだ。イケメンで滅茶苦茶強くて、美人のクラスメイトにモテる我愛羅は羨ましくて嫉妬もするけど、そんなことで見捨てるようなカッコ悪いことはやりたくないとかから思ったのだから。

「でもこのまま見てるだけなのもいけな……」

「どうしたの？緑谷ちゃん」

話かとまった緑谷を不審に思い、彼の視線の先を追った蛙吹が見たものは、

『先生をたのむ』

砂で形作られ、自分たちに宛てられた我愛羅からのメッセージだった。

はじかれる様に顔をあげ、今なお続く暴風の発生源へ視線を戻した彼らは、澄んだ青緑の眼とたしかに視線が重なったのを感じた。

視線を暴風の中心から離し周囲に目を向けてみれば、意識のないレーザーヘッドをのせた砂がヴィランに気取られないようゆっくりと緑谷たちの方に向かってきている。

（相澤先生や僕らが人質にでもなれば形勢がいつぱんにひっくり返ってしまふ。僕らは、今の僕らにできることをしないとイケないんだ……）

レベルの違いをまざまざと見せつけられ、不甲斐なさや悔しきはあれどそれらを噛み締めて緑谷たちは自分たちでできることを把握し、それらに尽力していく。

◆◆◆  
形勢が何度も一瞬で逆転したように、状況が変化したのも一瞬だった。

もはや何度目かも分からない拳と斬撃の応酬の中で突如として我愛羅が表情を驚愕のソレに変化させ、脳無から距離をとった。その後、高周波とそれに一瞬遅れて広場の地面が崩れ脳無の足場を奪う。畳みかけるように白い紐状のものがいくつも脳無にからまり全身を覆い、その巨体を即席のミイラのように変えた。

「我愛羅さん、助太刀致しますわ!」

「ウチらだってそこそこやれるんだよ!」

まだ卵である生徒から見れば戦場といっても過言ではないその場に介入した際に放たれた八百万と耳郎のコンビネーションはプロヒーローからも称賛が贈られるであろう一撃だった。

耳郎の個性で足場を崩し、八百万がイレイザーヘッドの武器である捕縛布を模倣して作成し拘束。仮に先の戦闘訓練で完璧にきまれば轟でさえ捕縛できたであろうソレは、

———  
こと今回においては相手が悪すぎた。

炭素繊維に特殊合金の鋼線を編み込んだ捕縛布は、一振りで気流を発生させるパワーと同等の力の前ではただの布と変わりなく、脳無は全身を覆ったそれを容易く引きちぎることで脱出を果たす。

「っ!? そんな!」

「なんて馬鹿力なんだよアイツ!」

脳無の異常性に動揺を露わにする彼女たちを置いていくように事態は悪化する。

「何をしている! はやく下がッ———」

死柄木の出した命令はその時点の彼にとつての最善手であり、我愛羅にとつて最も効果的な最悪の一手であった。

もつとも、死柄木は少ない彼らの会話から関係を推察した上での命令ではない。ある種の子どもじみた邪魔を排除したかったがための命令だったが、結果的に最大の障害であった我愛羅に大きな痛手を負わせることとなった。

一帯を揺らす轟音が響く

八百万と耳郎の回収・保護を最優先し、瞬きすら許されなかった刹那の時間の中で動かさせた限りの武器（秘）を自身に用いなかた彼は眼前に迫った怪人の圧倒的ともいえる暴力を、その両腕で防ぐほかなかつた。

これまでの戦闘で回避に徹する他ないと判断した攻撃。

プロヒーローをただの一撃で沈めた暴力。

結論から言うならば、我愛羅の判断は全く間違っていないなかつたのだ。

ただ防ぐのではなく限界まで力を受け流そうと構えたその両腕の

骨は粉々に砕かれ、怪人の拳に直で触れることとなった左手の前腕は  
抉られたような形となり半ば千切れかかっている。

吹き飛ばされた時に切ったのか、頭部から出血し腕の重傷の出血も  
あつて血を被ったような見た目となっていた。

個性による治療も普及した超人社会においても、まず間違いなく集  
中治療室に直行する必要がある重傷を負ってなお我愛羅は冷静で  
あつた。

『たまげたあ。大口径の銃くらったみたいになってんじゃん。だがこ  
の傷はあれか？銃剣パヨネット出せってことか？なら旦那を出しな！HURR  
Y!!HURRY!!』

むしろ余裕すらあつた。

ただ一つ彼に誤算があつたとすれば、

その姿が彼の雄姿に勇気づけられた者を、初の戦場での心の支えに  
していた者の、そして何よりも、彼を慕う者たちへの衝撃を考慮して  
いなかったことであつた……



てめーはおれを怒らせた

死柄木 弔は最高に気分が良かった。襲撃開始直後はイレイザーヘッドや砂を操る個性のガキにこっちの駒が蹴散らされるのはいい気分ではなかったし、切り札の脳無が役に立たなかった時なんてもう最悪だった。

だが途中で横槍を入れてきたガキたちを狙うように脳無に命令して、その策が決まった今ではもうそんな過ぎたことはどうでもいい。むしろ、その苛立ちの分だけ今の爽快感があるなら中々悪くないゲームのチュートリアルだったな。などと考えていた。黒霧がガキを一人逃がしたせいで本来の目的は達成できそうにないが、またチャンスはあるだろう。今回は練習だったと思えばいい。

それにまだ少し時間はある。今回のゲームは自由度が高いんだ。重傷になってるあのムカつく赤髪のカギをあの女たちの前で塵にしてやるのも面白い。その逆でもいいかもしれない。脳無に死なない程度に痛めつけさせて、何もできなくさせてから目の前で一人ずつ、手足から塵にするのも楽しそうだ。女は二人いるんだし、どっちから塵にするか決めさせてやるのがいいかもしれない。

死柄木はこれまでの鬱憤を晴らさんばかりに、子どもの様に無邪気で残酷で恐ろしいと人が感じる手段を次から次へと考えていた。わざわざ脳無に止まるように命令し、涙を流し我愛羅に縋りつく八百万と耳郎の光景を心底愉快そうに眺めながら。

まるで、もう勝ちが決まったかの様に。勝利が確定したかのよう

に。

死柄木 弔はまだ知らなかった。

深手を与えた存在こそが、追い詰められた者こそが脅威に成り得ると。

「——ああ？なんだよ…今さら命乞いでもするのか？面白かったら考えてやってもいいぜ」

死柄木は考えるだけであって、止める気など欠片もなかった。少しでも希望を持たせた方がいい顔をするだろうと考えていた。

そんな言葉をまったく意に介さず我愛羅は続ける。

「貴様らには今、二つの選択肢がある。

一つ 投降して無傷で捕縛されること

もう一つは、抵抗し俺に倒されること

こちらとしては一つ目の選択肢を勧めよう。」

「くくくく、なあ黒霧、俺の耳がおかしくなったのか？この状況から投降しろって聞こえたぜ」

「ええ死柄木 弔。私もそのように聞こえましたが」

死柄木は心底可笑しいと言わんばかりに腹を抱え、そばの黒霧は困惑していた。その発言の裏に何があるのか考え、全く理解できなかったが故に。

「この状況で誰が投降するんだよ？馬鹿なのか？頭がおかしくなったか？クリア目前で誰が諦めるか？——！？」

死柄木はそれ以上しゃべれなくなっていた。黒霧もまた同様に。

「二を捨てるのだな？」

服のすそを掴む八百万と耳郎の手を宝物を扱うように丁寧に、優しくほどいていく背中越しの我愛羅の声が、気配がどうしようもなく恐ろしいものを感じられたのだ。

それは生物の本能で感じる恐怖。あり得ないと思えば否定するが本能と身体がそれに従わない。

「俺は、警告した」

ありえない、ありえない、否定、否定、この圧が、この恐怖が、

巨悪との初対面、己が体験した最大の恐怖に匹敵しているなど

「俺の大切な学友たちを、恐怖と危険にさらした罪文字通り貴様らの体で償ってもらおう」



——むしろ打撃音の数が増えていた。

「あのガキ!!脳無と真つ向勝負をつっ!!?」

「信じられない!!それにこの暴風では脳無の援護などとてもっ!!」

正史 原作におけるオールマイトが行った脳無の攻略法で挑む我愛羅はしかし、オールマイトと決定的に異なる点が存在していた。

「く、狂ってやがるっ!!」

迫りくる拳を逸らすことも防ぐこともしない。連撃の速度を上げて手数で押し切ることもしない。己の苦痛も、損害も完全に思考の外に追いやったノーガードスタイル。

当然、彼の肉はその超負荷に裂け骨は粉々に碎かれる。至る所から出血し全身を赤く染めた我愛羅はそれでも止まらない。

現在の我愛羅はその身に九宿す存在の膨大なエネルギーを強化外骨格として纏うことで、膂力や回復力などの身体能力を超強化し脳無との正面戦闘を可能としていた。

だが、超高密度のエネルギーにさらされる彼の肌は耐え切れず焼き切れるのと同時に底上げされた回復力により再生されその端からまた焼き切られることを繰り返すという、余人が知れば正気を疑うような状態でもあった。

戦闘による負傷と己の形態による自己破壊。もはや血を纏っているようにしか見えないような恐ろしい姿の彼は何を胸に戦っているのか。死柄木たちと同様に介入できず固唾を飲んで見ていることしかできない、転移させられたUSJ各所から戻って来た雄英生はそんなことを考えていた。

規格外の戦闘に呆然としたのではなく、己が目指す目標として少しでもそのあり方を学ぼうとするが故に。

『エテゾクリムソン血殖装甲!!!喰らえ、僕の百裂拳!!!』

『さっさと決めろ!! 貴様の身体がもたんぞ!!』

拮抗が崩れ始める。

ショック吸収の個性の許容限界に達した脳無の体が、体格の差から僅かにだが下から繰り出される我愛羅の一撃を受けるたびに、徐々に持ち上がっていく。

「——あ、あり得ない……」

地に足がつかず土台の無くなった脳無の攻撃など意に介さず、我愛羅は渾身の力で脳無をかち上げた。

空中での移動手段を持たずそれでもなお命令を執行しようとする手足を使ってあがく脳無に向け、我愛羅はその赤黒い巨体の顎を開く。

光が収束するかのようにして形成されていく球体が放つ熱は遠巻きに見ていた者たちの肌にもまで伝わりその脅威を知らしめる。その脅威ゆえにさらに距離を取ろうとする雄英生たちの前で、我愛羅は顔の半分ほどまでになった球体を体内に収めた。放射状に拡散するエネルギーを体内小さな器に入れ、強引に指向性を持たせたそれはまさしく天に輝く光の柱のようであった。

空中にてあがく脳無には、アンカー固定具として地に下ろされた四本の尾がアルファベットのXを彷彿とさせ……

『サテライトキャノンツ!!』

光の柱にのまれた脳無は彼方に消え、静寂が生まれた。

その後、USJより脱出した学級委員長が雄英教員であるプロヒーローを引き連れて帰還。主犯格である死柄木に手傷を与えるも捕縛には失敗。結果、襲撃敵の大半を逮捕・同伴教員二名の重軽症・

生徒の負傷者0という世間的に見れば敵連合の敗北で雄英高校襲撃事件は幕を閉じたのであった。

◆◆◆

日本 とあるバー

「話が違うぞ先生え!!!何が対平和の象徴だ!?雄英のガキ一人に真正面から叩き潰されてるじゃねえか!!!」

『——ふむ、僕も脳無を通して観させてもらったけどアレが相手では仕方ないさ。大丈夫、平和の象徴は確実に弱っている。今回立ちふさがったアレも対処法があるさ。今回のことを糧に成長すれば何も問題はない。』

『これらも、これからぶつかるとの全て君が成長するためのものだ。全ては君のためにあるんだ、死柄木 弔。』

世間が敵連合の敗北を、雄英の強さを風潮する最中に、逃れた悪意はより強大なものへと変貌していく。